あと

8

2011

恩田秋夫の一茶俳句切手

湖に尻を吹かせて蝉の鳴　一茶
蝉なくや貧乏かづらも時を得て
山人や袂の中の蝉の声
むく犬や蝉鳴く方へ口を明
青空はいく日ぶりぞ蝉の鳴
ざんぶりと一雨浴て蝉の声
蝉鳴や今伐倒す松の木に

恩田秋夫氏養清堂展讃々す

菖蒲湯、夜櫻の大作の他に、つくづくとネンゴロな、花むくげの諸作の大立派は、この板画人の最もの叙情であり板魂であると信ずる。恩田秋夫氏の制作に対しての無碍な作法をわたくしは驚嘆する。どこまでもどこまでも清く優しく静かにそして韻（ヒビキ）をおもむくままに御し得る作家のこの人にあるのを身応する。今まで数に知れない程にただに個展にまかせて発表したおびただしい作数の如意自在の姿心を讃嘆する。何度どう讃々しても讃嘆し切れない無限をこの養清堂展作品のすべてに渡る大いなる日本板画の韻風を見る。切々に観機する。

棟方志功

左記は昭和44年の恩田秋夫木版画展の案内葉書の文である。恩田先生は弟子思いの素晴しい先生をもたれたものだ。

あと

八　月

遠き旅

遠き旅了へたるひとの産聲す
海髪汁やふりかへることひとはする
はしり梅雨淺草一の一の一
夏椿息ふるゝとてちりにける
牛乳を壜からのみて梅雨をはる

本町三　佐藤喜孝

⊕

肩書を脱ぎすててまづ更衣
青葉風いざ働けと吹き通る
海見ゆる蜜柑畑の花匂ふ
てのひらを蹴ってとびたつこがね虫
独りごとさらってゆきぬ青嵐

逗子　鎌倉喜久恵

アメリカ・カナダ旅行の思ひ出

アンカレッジ白夜乗継ぐ旧空路
薄暑なり雑踏の町ニューヨーク
クレパスは千古の藍を大氷河
ナイヤガラ瀑布は虹を生みつづけ
真夏の夜の夢かトーテムポール群

川崎・小田栄　木村茂登子

⊕

G線上のアリア幻聴木下闇
ためらひつつ片白草を手に掛ける
花十薬一直線に走り出す
節電の銀座八丁人涼し
夏かをるISSEY MIYAKEの色づかい

京橋　篠田純子

蛇苺

蛇苺むかし馬車馬輓きにけり
シーソーの一端にのり雨蛙
昼の蚊のほのぼの鳴いて出水の禍
たらちねの愉しさうなり梅を干し
栗の花墓碑の俗名父に同じ

剱地東出（つるぎちひがしで）　定梶じよう

尾瀬

ゆらゆらと水中に生り水芭蕉
立ち止まる猩猩袴の丈短か
郭公や木道濡るる尾瀬ヶ原
初夏の尾瀬はいよいよ去り難く
三月を引き摺りながら夏来たり

所沢　須賀敏子

引鴨

木の上に鷺の吹かるる抱卵期
羽くろき川鵜水面を切ってとぶ
チョットコイとは小うるさき春の鳥
遠目には毬のやうなる鳰の雛
引鴨や人は踵をかへすのみ

浦和　竹内弘子

梅雨の底

青梅やチラシ配りは小走りに
横たはるわれ魚めく梅雨の底
夕燕鮨詰電車通過せる
通学の頃は省線柿の花
葉の落ちし音か小蛙とぶ音か

田端　田中藤穂

馬鈴薯の花

県花観る人の混雑花菖蒲
神域の廊下は古ぶ柚子の花
がくがくの肢体投出す花蜜柑
山坂に肩で息する栗の花
待ちかねし馬鈴薯の花白きかな

富田　長崎桂子

⊕

今年竹あれよあれよと抽んでる
水甕の底すけて見ゆ姫睡蓮
箒の手止まるでんでん虫の角
蝉の穴去年のままなる寂けさよ
梅雨に入る駅の通路のほの暗し

大宮　早崎泰江

土用波

のうぜんや鳩の赤足ひたひたゆく
忘れては思ひだす花雲の峰
土用波ときをり母の声ありぬ
横丁を出て横丁へ原爆忌
もて余す主婦の霍乱カレーライス

河田町　堀内一郎

朝烏

緑濃き瓶に十薬朝烏
六月の光飛び交ふ闇にをり
男三人庭の角掘る梅雨曇
電光に人身事故と夏の昼
夏の蝶しゃがみ小石をにぎりしむ

落合　森理和

⊕

母命日さくら花びら散るさくら
大津波が忘るる六月の海青し
しろしろと風にゆだねし山法師
枇杷の木に生った気配のなき下枝
書漏らすルビ真夏の夜の二度寝の夢

鍋屋横丁　吉弘恭子

鎌倉

夏至空や目を伏せ御座す美男佛
体内の螺髪の凹み暑きまま
はいチーズ紫陽花通り渋滞す
氷菓子の学割料金大人気
羅の群れ江の電の無人駅

清瀬　赤座典子

一人一句

貝櫓母の日の母手を振れり　佐藤喜孝

蟻が蟻引摺って行く昼下り　赤座典子

体内の気泡あわだつ五月闇　安部里子

葉表をみな陽に向けて柿若葉　木村茂登子

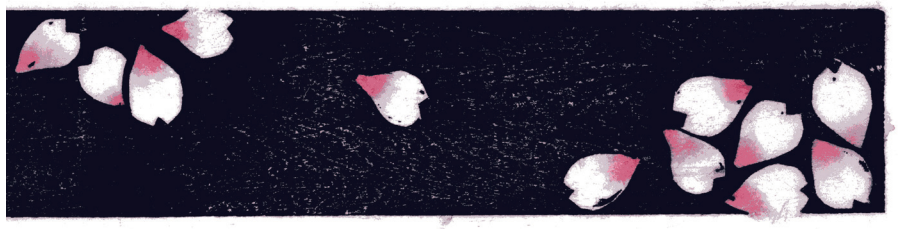
妄想が思想となる日なめくぢら　篠田純子

紅つつじ世にかかはらず咲き出し　芝宮須磨子

梅雨の夜灯せば箪笥鐶が照り　定梶じょう

夏帽子今日一日を日本橋　須賀敏子

雉鳩の古巣かぐろし梅雨に入る　竹内弘子



前月作品

万緑やわれにも未来あるごとし　田中藤穂

余震頻頻離婚届にサインせる　東亜未

サングラス自分がすこし変るよな　長崎桂子

原発を憂ひし春のキャベツかな　早崎泰江

繰りごとは病ひのひとつ半夏生　堀内一郎

ドミンゴの歌ふ「ふるさと」緑雨かな　森理和

ホームレスの小屋に小さき鯉幟　山荘慶子

初夏眩し他国籍語の真ん中に　吉弘恭子

喜孝抄

七月作品より

定梶じよう

枕とは膝の高さよ春の晝
柿若葉膝を崩して猫坐る　佐藤喜孝

一句目。春の晝ですから、本来妖めかしい内容の筈。それがそう感じないのは、「枕とは」の措辞の故でしょうか。　女性の膝が枕の高さである、と言えばこれはもうなまめく句になりますが、一つはずして枕の高さを主格にした。

次句。柿若葉の明るさの中で坐っているのが猫ですから、単純な写生句ととって当然の句ですが、喜孝さんはそう簡単に句を作らない。その坐りようが「膝を崩して」いるのです。なんとまあ婀娜っぽいこと。

ともに、仕掛のある句。

凡凡と暮すのも良し棕櫚の花　赤座典子

上五中七は、いわば言いふるされた措辞。ですから少し経験をつんだ方々の集う句会では、こういう句は入点することは少ない。しかしです。だからこそ斯う正直に言われると、改めて考えてしまうのです。私の近隣に住まっていた方で八十才でなくなられた男性。その数日前に、「俺の人生は、まあまあだった」と仰ったそうです。自分の人生を肯定的に捉えることが出来るのは凄いこと。典子さんの感慨もまた同じ。そして何の脈絡もなく、草間時彦の〈ひとり子を溺愛の妻棕櫚咲けり〉を思い出していたのです。

さくらんぼ一粒程の幸あれば　安部里子

読みようとして、「さくらんぼ」で軽い休止があって、「〈この〉一粒程の幸あれば」と読むべきでしょうか。　ともかく、眼前にさくらんぼがある。眞っかなものよりいく分朱を含んだものの方がこの句に似あう。そしてこの一粒程の幸でいい、それがあれば、と。

ささやかな幸をささやかに望む。　佳句と思う。

若葉風ビニール傘が街を行く　芝宮須磨子

この傘は日傘か雨傘か。季語から解すれば雨は考えにくいが、日傘にビニール張りのものがあるのでしょうか。なにしろ男性は日傘についてよく知らないのが本当なのです。

傘地にビニールを貼ったものは簡易のイメージがありますので、単純に情景句として鑑賞すれば、木々の多い街筋を紺色のあるいは白地の傘が行く。勿論女性でなければならず、それも御屋敷の奥様風であってはならない。「ビニール」の語にはそんなイメージがつきまとう。

雪解風川面に湯気の立つところ　竹内弘子

水面に湯気の立つのは、温泉が流入しているのでなければ、水面とそれに触れる空気との間に、極端な温度差がある時。

掲句、雪解ですから、暖かい風が吹き出して川面のまだ冷たい表面に触れ、水蒸気化したのでしょう。とまあ、理屈はそっちに置いといて、この句の秀れているところは、結局「立つところ」と止めたことでしょう。

滔々あるいは淙々と流れていた雪解水があるところに来て淀みとなったに違いありません。それが「湯気の立つところ」なのでしょう。

結局が鑑賞の幅を広げたのです。

ヒレカツに辛子たっぷり荷風の忌　田中藤穂

何十年も前の話になりますが、万太郎の〈パンにバタたっぷりつけて春惜しむ〉の句に対して、「バタは可笑しい。バターでなければならぬ」と主張した男がいました。で、句会を主宰する先生が「『バタ』は東京弁であると」と。

その伝で言えば、大阪では「ヘレカツ」と言うようで、従って、東京生れの荷風は当然「ヒレ」と言ったことでしょう。

こんがりきつね色のヒレカツにたっぷりの辛子。さらにきざみキャベツ。荷風だって堪らないでしょう。

少年に四谷怪談白き夏　　堀内一郎

怪談は夏のもの。掲句でこの怪談に関わるのが少年。ここに「白き」の語と響きあうところがある。当然「白き」は「夏」に掛るのでしょうが、中七にも幾分ひびくところがある。四谷怪談を見るのが少年であること、これが「白き」の語を引出したに相違ありません。

言問ふて春の草ほどまぶしかり　　吉弘恭子

私の記憶の隅にあって時おり思い起こす句に、〈指差せば片栗の花耻かしがる　島将五〉があります。この句では耻かしがるのは片栗の花ですが、掲句でまぶしく思うのは恭子さんご自身。それも春の草ほどだという。まことに微妙なところを詠んで、将五句に通うところがある。

そして、私に難しいのは上五の措辞。春の草ほどまぶしかったわけですから、単にことばをかけただけではなさそう。あるいは、都鳥にいざこと問はむ、とばかりに問いかけたのでしょうか。これが男性の句なら、妙齢を思いうかべるところですが。

いずれにしろ、色・やわらかさ・におい・丈すべてを含めて春草ほどのまぶしさを何かに感じたのです。

あをかき集

田中藤穂選

花十薬こぞりて放つ息のあり　篠田　純子
昼顔や絡みつきつつからまるる
人嫌ひの一族であり夏の月
迎へ梅雨もののにほひの沈む道
夏痩の猫の平たく角曲る
茅の輪潜るただただ祈ることのあり
半夏生寂しき人の頭にかざす

南天の花のこぼるる路地を掃く　須賀　敏子
この夏を久留米絣で迎えたり
梅雨晴にクレーンいよいよ高くなり
六義園泰山木は遠くから
梅雨の日を至福の時に針を持つ
紫陽花や時には辛い話聴く
学校に慣れて楽しげ小町草
やうやうに咲きし凌霄色薄し　赤座　典子
日の落ちて漸く六月に戻る
見詰めゐる熱き闘ひ暑さ消ゆ
真夜中に遠雷の過ぐ夜汽車めく
節電の扇風機喉傷めしと
建築家の名のある通り風薫る　早崎　泰江
いつもの道日傘同士のすれちがふ
捨てるもの多き一生更衣

葉の影の深きしづけさ青葡萄
用水路わがもの顔の水馬
青々と呼吸するなり青田風
香水の柑橘系と擦れ違ふ　木村茂登子
父の日の父の何やら落ち着かぬ
さうめんを自分は食べず流し役
大空に神の手になる虹の橋
向日葵の種播く復興の願ひこめ
雲の色もあぢさゐの色も変る日々
茗荷のせいにしてゐる物忘れ
白百合や九十八の眠りつく　森　理和
柩の中手甲脚絆片結ぶ
親不孝孝行のをり柿青し
蚊遣火や長押の上に父と母
蔕帯の確かと離るる茄子かな

夏野菜産地直送支援策　長崎　桂子
虫食ひの菜に五日後や紋白蝶
桐の花野菜畑の真中に
緑雨きて畑の色合水彩画
植込みに蚋たかり来る雨続き
食事会招待状に枇杷たわわ
雷除のお札を買うてスカイツリー　佐藤　喜孝
追伸のやうに雷こぼれおつ
八月の鴉も鳴かぬまつぴるま
とどまりて地軸を指せる半仙戯
可惜しぶ莟のままのさくらかな　吉弘　恭子
葉桜に見え隠れせる実のすこし
ややとならびさくら落葉を踏むきびす
もの言はぬ腕力秘めて猫の恋

住句後言

人嫌ひの一族であり夏の月　純　子

人嫌いの一族はやや暗いが、夏の月でゆるやかにくくったのでほっとする。この頃は日本中みんながお喋りが上手になって、タレントはだしなのは、ちょっとつまらない。この人嫌いの一族、じっくり向合ったら意外に深い面白いものを持っているかも……。

迎へ梅雨もののにほひの沈む道　純　子

〝もののにほひの沈む道〟が上手い。迎へ梅雨の細かい雨がじめじめしとしと降る季節は大気も、物の匂いも肌にべっとりまつわりつく感じだ。ゆく道にもいろんなものの匂いが地上近くに沈澱しているようだ。作者の感覚は鋭い。じめじめした梅雨は嫌だけれど、日本は四季に恵まれた国だと思う。それ故に、その風土に暮す人々は、細やかに感受性豊かな心を持つ。

俳句歳時記の厖大な数の季語をみても、日本人に生まれた幸せを感じるのですが。

南天の花のこぼるる路地を掃く　敏　子

大人しい句ですが、作者の誠実で落着いた生活が伝わってくる句です。

見つめゐる熱き闘ひ暑さ消ゆ　典　子

差詰めなでしこジャパンのサッカーでしょうか。大柄の外人選手を相手に、ねばりづよく機敏に渡り合って、とうとう決勝戦へまでもちこんだ。見つめて応援している方も熱中して、暑さなど吹っとんでいる。

葉の影の深きしづけさ青葡萄　　泰　江

あをの句会で月一度伺う落合の傳茶房、七月十二日はまさにこの句のような風景でした。作者は葉の影に注目しているようですが、葡萄は、葉も蔓も実も美しくて、子供達が幼稚園でいただいた小さなカードの「私は葡萄の木、あなたがたはその枝である」という聖書の言葉が、いつも浮んでまいります。

父の日の父の何やら落ち着かぬ　　茂登子

父の日は日本では、母の日のあとづけで出来たようで、母の日ほど盛んでないような気がする。

父の日のお父さん。家族が今日何かしてくれるかな?プレゼントでもくれるかな?でも自分から口に出せず、何となくそわそわしているのだ。案外可愛いお父さん。日本の風習も以前とはずい分変ってきたようだ。

雲の色もあぢさゐの色も変る日日　　茂登子

「諸行無常」「ものなべて移ろう」は仏教の根本思想だそうです。人間の生活だって、一寸先のことはわかりません。でも変化があるのはまた希望に繋がるかも知れません。

一瞬の雲の美しさ、今日の今のあじさいの色をしっかり心に刻みつつ生きたいものです。

蚊遣火や長押の上に父と母　　理　和

長押の上に亡きご両親の写真が飾ってあるのでしょう。蚊遣火を焚いたらその煙がすうっとその写真の方へ立ちのぼっていって、写真の表情が動いたように見えた。そして父も母も健在で、一緒に蚊遣火を焚いた頃が一気によみがえったのでしょう。限りなく懐かしくあたたかい一句です。蚊遣火はもちろんあの緑のぐるぐる巻いた蚊取線香でなくてはなりません。

吟行案内

羽田空港

日時　十月一日（土）十一時

集合場所　京急電鉄・都営浅草線「羽田空港国際線ターミナル」駅（改札を出ないで降りたところで待つ）

参加希望者は九月二十五日までにご連絡下さい。

連絡先

佐藤喜孝　090-9828-4244

近世俳諧と漢詩文　四五

王　岩

杜子美か漫興による

花の雪二月やぶれて五六日　　米　仲

江戸時代中期の俳人、岡田米仲の句である。米仲は前田青峨の弟子で、江戸座の有力俳人である。著書に『たつのうら』、『靭随筆』などある。

前掲の句は『米恩』に出典する。句前の「杜子美か漫興による」という前書きから分かるように、句は杜甫の「絶句漫興」を踏まえて詠んだものである。

二月已破三月来、　二月已に破れて　三月来り
漸老逢春能幾回。　漸く老いて春に逢ふこと　能く幾回ぞ

莫思身外無窮事、　思ふ莫れ　身外無窮の事を
且尽生前有限杯。　且く尽くせ　生前有限の杯を

杜甫は我が身に迫りくる老いを詠み、年を取った自分が後何回春を迎えることができるか心もとない。あれやこれやと思い悩むよりは、生きている今を大切にして、飲めるだけ飲んでおいたほうが賢明であろう。米仲は杜甫詩の起句の「二月已破」をそのまま生かして、季節が春に入ったばかりのことを句で表現した。

「たつのうら」より

いでや我よきぬのきたりせみごろもばせを

はづれ〳〵粟にも似する薄かな　園女

草の葉を游びあるけよ露の玉　嵐雪

あを柳集

兼題　入　　佐藤喜孝　選

職を退き詩吟入門若葉かな

まさに若葉光のやうに明快な作。ひとつ終れば一つ又はじまる。前進あるのみの人生である。「若葉かな」がこの句を屈託のない作品にしてゐる。

入れ違ひに家を離るる百日紅

ただならぬ内容の句である。家を離れてゐた家族の一人が戻つてきた。と思つたら別の一人が家を離れていつた。ドラマの仔細は不詳だが百日紅の紅が緊迫度を増してゐる。

入会地祖母と二人で蕨折る

蕨は摘むものであらうか、折るものであらうか。「摘む」の例句は多いが「折る」の方が蕨にふさはしく思ふ。「いにしへを思ひこそやれ山深みふたり折りける春の早蕨　藤原俊成」。掲句も俊成の歌のやうに懐かしい回想の句であらう。入会地といふ言葉がもたらす自然環境が回想に確り根を下ろしてゐる。

題詠「入」（順不同）

職を退き詩吟入門若葉かな　長崎　桂子

心太入荷は二・三日後と言ふ

端居して又読返す入選句

かげろうて入日をとどむ水面かな　吉弘　恭子

向ふ岸日傘会釈す入り日かな

入れ違ひに家を離るる百日紅

吸入器子の口離る寒夜かな

入会地祖母と二人で蕨折る　篠田　純子

雪解けに足をすべらせ尾瀬入山

山門不幸あぢさゐ濡るる寺へ入る　田中　藤穂

堅絽なる嫁入り衣装明治遠し　木村茂登子

露草や猫専用の出入口

入魂の汗の一勝クルム伊達

夏草や茂るまま立入禁止地区

廃屋に出入りをする旱雲　佐藤　喜孝

頭の中に光が入る夏椿

完爾と入るアイスクリンの匙四角

あを創刊十周年特集

清澄亭

あを一〇周年祝賀会の記

森　理和

二〇一〇年十一月十三日（土）都立清澄庭園内「涼亭」にて『あを』十周年のお祝の会を催しました。多少雲の多い日でしたが風もなく、冬紅葉や何種類もの水鳥を愛でつつ食事会と続く句会を楽しみました。

午後一時喜孝さんの挨拶ではじまり、八田木枯先生の「他の句会へは殆ど参加しませんが、佐藤喜孝さんの新しい句作りに対峙する姿に共鳴し、比類ない発想（難解の時も）の楽しさに毎月の『七座』句会に出席しています」旨のご祝詞をいただきました。

一郎さんの乾杯で今半のすき焼辨当を頂き暫し歓談致しました。この間に各自選二百五十句の限定一冊の句集が手渡されました。喜孝・恭子ご夫妻がこの日を目指し各々の個性を活かした表紙・カットにいたるまで細やかにレイアウトされた一冊でした。

二時半から句会に入り、披講は自己紹介を兼ね各自が選句を読み上げました。遠く四日市から参加されました長崎桂子さん、傳句会・七座句会・句友の斧田綾子さん・宇都宮敦子さんと、二十二名の参加者でした。

木枯先生一郎さん喜孝さん弘子さんが各天地人を選句し、その場で毛筆の短冊を書いて頂き各賞に当てられました。

池に張り出た涼亭は三方が透き硝子、鴎や青鷺も飛来し夢心地の中での会でした。

和やかに、一郎さんのハモニカ独奏がありました。「ふるさと」「赤とんぼ」等。味わい深い演奏にしばし言葉を失い聴き入りました。

「追われるような忙しさの十年も振り返ってみれば短くも感じ、今日はまた新たな一歩でもあります」と喜孝さんの言葉で閉会となりました。

かえりみて

吉弘恭子

昨日サッカー選手の松田直樹さんが所属するチームの練習中に倒れ意識が一度も戻ることなく介護の甲斐もなく急性心筋梗塞で亡くなってしまった。高校卒業後すぐJリーグに入団直ぐプロデビューした。天才的な守備の要。

サッカー大好きな私はJリーグでは応援するチームがあるが他のチームでも大好きな選手がいっぱいいる。その中の一人が松田選手であった。昨年慣れ親しんだ チームを解雇され今まで応援してくれたサポーターに「僕はサッカーが好きなんだ。だからもっとサッカーをしたいんだ」とチームを去る時の言葉が紹介されていた。私の大好きなゴン・中山選手の泣きそうな顔キング・カズの今にも崩れそうな顔がテレビから流れた。昨日一日中、松田選手のこの言葉が頭から離れなかった。

この言葉を聞いて「あを」創刊時のことを思い出し、私の思いを書いてみたくなった。

代表の佐藤喜孝は暖流をはなれ、新しい雑誌の編集に携り10年過した。この10年は短かったのか長かったのか今では夢中で過した10年だったことしか頭にない。

このあと「私は俳句が好きだ。だからもっともっと俳句を知りたい。楽しみたい。続けたい。」の思いを秘めている喜孝に少しでも手伝うことが出来るかなと思い、「あを」創刊に賛成した。

その時の出句者は23名であった。

群青の上に紺碧カモメ飛べ　佐藤　喜孝
名月や黒く小さくわが家あり　竹内　弘子
赤まんまひとり離れて男の子　内藤　悦子
萬歳して枯野の方へ駆けてゆく　堀内　一郎
かはせみや二つ並びしトルコ石　赤座　典子
鴨の群一羽離れてせせらぎに　石森　和子
トマト一つ手向けて猫の墓参り　鎌倉喜久恵
起つ時に膝に手を突く老の冬　栢森　定男
蜘蛛の巣に顔をなぜられ星月夜　河合　笑子
子に逢はむ千歳空港着ぶくれて　後藤　志づ

玻璃の窓冬夕焼を引き寄する　斉藤　静枝
餌を撒かれ乱れ初めにし鴨の群　篠田　純子
炉開きや障子の陰に日の移る　芝　尚子
初芝居土産の京紅そつとさし　芝宮須磨子
山里に隠れる如く節分草　須賀　敏子
吊橋の少し揺れゐる初紅葉　鈴木多枝子
屈託を水に沈めて浮寝鳥　関口　ゆき

銀杏に灰の温もり分けて食ふ　竹内　芳子
初夢の母に着物を着せてもらふ　田中　藤穂
割れガラス風に母国の香りかな　M　O　E
炉火朱し夜咄の茶事寡黙なる　松村美智子
天高し電車のんびり訛交ふ　松本　米子
日をあびてうぶ毛ひしめく大旦　吉弘　恭子

10年といえば長いように感じるが振り返ってみるとあっという間だなと誰もが回顧録で言うような言葉になってしまった。

現役で仕事をしている喜孝にとって、本の制作との両立は大変であるが、楽しそうにしている姿はまわりで見ていても良い。60才から70才の目の廻るような忙しさと充実した10年間であったと思う。

息あるまで俳句とのつきあいは尽きることはないが、指針でもあり、相棒でもあると思っている佐藤喜孝俳句を少しでもとり入れることが出来ればと思いながら、これからも年齢にとらわれず若々しく俳句を学んでいこうと思いを新たにした今日である。これからの10年が何だか楽しくなってきた。

「あを」を創刊してよかった！

「あを」を応援して下さっている会員の皆様、長いようで短かった十年間、本当に有難うございました。

松田直樹選手のご冥福をお祈り致します。

二〇一一・八・五記

八田木枯　選

天　一本の紅葉を軸に日のまはる　佐藤　喜孝
地　日の鴨と日陰の鴨と入替る　芝　尚子
人　小春日のあを十年の中にゐる　安部　里子

堀内一郎　選

天　日の鴨と日陰の鴨と入替る　芝　尚子
地　次の世はこんな香りか敷松葉　宇都宮敦子
人　山茶花や温かかりし句友の手　田中　藤穂

竹内弘子　選

天　墨東に雲ちぎれとぶ小春かな　八田　木枯
地　踏切のカンカンカンと柿熟す　須賀　敏子
人　秋の水青鷺己が影うつす　早崎　泰江

佐藤喜孝　選

天　次の世はこんな香りか敷松葉　宇都宮敦子
地　日の鴨と日陰の鴨と入替る　芝　尚子
人　踏切のカンカンカンと柿熟す　須賀　敏子

墨東に雲ちぎれとぶ小春かな　八田　木枯
小春日やいくたびも機を逃す鷺　斧田　綾子

小町麩のとろり小春の鯉の口　宇都宮敦子
初鴨に姫松は薦まきをへし　佐藤　喜孝
祝いごとのとほくて近き石蕗の花　堀内　一郎
石の橋わたりて鴨をおどろかす　竹内　弘子
日の鴨と日陰の鴨と入れ替る　芝　尚子
櫨紅葉余り有るなりあを深く　森　理和
冬晴の十周年寿ぐ石に松　長崎　桂子
共にきし十年（とせ）の月日櫨紅葉　田中　藤穂
冬空のあをさに吸はれゼロになる　篠田　純子
古池の芭蕉句碑見む落葉踏む　早崎　泰江
石蕗の花見てゐる亀の立泳ぎ　赤座　典子
冬ぬくし清澄庭のあをとあふ　安部　里子
野仏に手を合はせたり菊日和　須賀　敏子
色かへぬ松や一誌の十年成る　鎌倉喜久恵
名園も今日は吾がもの紅葉狩　木村茂登子
清澄は青々としてはぜ紅葉　斉藤　裕子
庭掃きて残る落葉に風少し　續木　文子
東屋に先客がゐる小春かな　吉成美代子
秋水や松のすがたもさざなみに　吉弘　恭子
冬初め「あを」の未来に栄えあれ　東　亜　未

遊び足　天の川　安房　一客一亭

春風や観音様の「遊び足」
木村茂登子

天の川見てゐるわたし星の中
續木文子

安房の国入日はいつも菜の花に
鈴木多枝子

初時雨一客一亭茶飯釜
森山のりこ

隠田　折紙　円周率　一本の薔薇

百万本いいえ一本の薔薇でいい
須賀敏子

円周率ゆたかに夏の大樹かな
遠藤実

折紙の試行錯誤に明易し
芝宮須磨子

隠田を植ゑて迷子のごとく出づ
渡邊友七

鵲村字小鮒江　かはり玉　小　面　潮だまり

鵲村字小鮒江の春の水
田中藤穂

鳥渡る口にころがすかはり玉
吉弘恭子

小面の目の奥に見る春の闇
芝　尚子

潮溜り海月とろりと眠りをり
鎌倉喜久恵

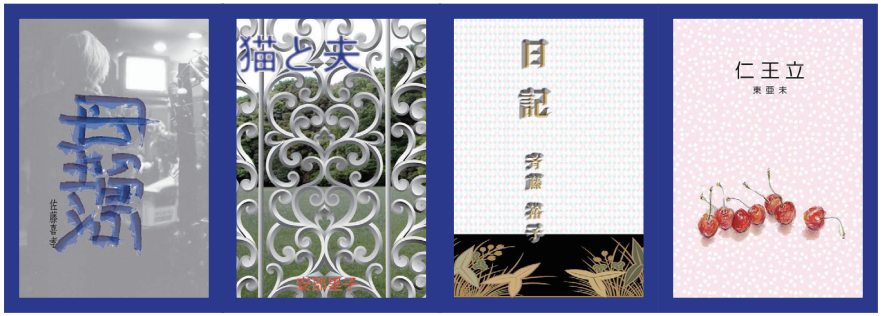
つゝがなし　張三李四　旅の途中　畳

天井の分だけ畳明易し
堀内一郎

あの雲も旅の途中か夏帽子
吉成美代子

時雨来よ張三李四の軒々に
定梶じょう

山ももの木のつつがなし小鳥来る
長崎桂子



仁王立　日記　猫と夫　母瑠河

秋高し仁王立ちにぞ満一歳
東亜未

冬籠父の日記に我が名あり
斉藤裕子

そら豆はおたふくの顔猫と夫
安部里子

母瑠河夜長高島茂算術す
佐藤喜孝

真中　丸餅　ラムネ菓子　椀二つ

その日から家族の真中風車
森理和

丸餅の慣ひ捨て得ぬ雑煮かな
早崎泰江

ラムネ菓子マルセル石鹸カタン糸
赤座典子

茜雲七草粥の椀二つ
山荘慶子

あとがき

あを十周年記念号とも言ふべきものがやつと形に出来た。この遅さは石器時代なみである。これはひとへに私の責任。私の記念句集の遅れでしかない。遅まきながらやつと形にした。『青写真』と『あを』発行前までとしたが正確ではない。『母瑠河』と名付けた表紙は表紙は高島茂が今は無きスナツク『公園のベンチ』で熱唱してゐる後姿に、とイラストレータで描いた〝母瑠河〟を乗せた。某人に見て頂いたら私と間違へられた。さういへば髪は真白である。見返しは茂さんが書いたボルガの店の計算書。無理を言つて一枚頂いておいたものを今回使はせて頂いた。昭和52年3月1日の日付で合計金額が書いてある。がそれは消してしまつた。どういふ仕組になつてゐるのか分らないが、よくこれで間違へずにお勘定が出来るものだといつも感心してゐた。旧盆の茂に捧げる一書とした。

〈喜孝〉

あを十周年記念句集頒布のおしらせ

記念句集のご希望者は著者名と冊数を編集部までお知らせ下さい。一冊からご注文受け賜ります。数が一定量まとまりましたら増刷致しますので納品期日は確約出来ないことお許し下さい。

一冊　千七百円＋送料

尚、近日中にネット公開の予定です。ご期待下さい。

二〇一一年八月号

発行日　八月十四日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090-9828-4244
佐藤喜孝
竹僊房
印刷・製本・レイアウト
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。

祝賀会アルバム

2010.11.13

清澄庭園にて